

松本先生・サントニ先生が仏文教室に残した遺産

宮川 朗子

今この原稿を書いているのは、2015年11月。会員の皆様に研究会誌が届くのは、その数か月後のことになると思います。その頃には、遂にその時が来てしまった、と思うのかもしれませんが、今は、その時が来てしまうのをまだ信じたくない気持ちです。

「その時」というのは、松本先生、サントニ先生が同時にご退職される時です。思えば広島大学、しかも文学研究科に採用されるという幸運に恵まれてからはや7年以上が経ちますが、これまで私は、両先生に守られて、何の苦労もなく、ぬくぬくと暮らしてきたのでした。今年になって、教室運営を覚えるようにと、主任の仕事を任されたのはよいものの、次から次へとやって来る業務にとまどい、何度も何度も松本先生の研究室のドアをたたき、参考資料やファイルをいただいて帰る私は、資料吸血鬼と化しておりました。先生が、こころなしか、最近少しお痩せになられたのは、先生の血と肉の結晶である資料やファイルを私に吸い取られたからに違いありません。そして、言い訳がましいのですが、先生の生き血を吸っていたのは、私だけではなかったのです。それは…

ところで、スリムになったのは松本先生だけでなく、残念ながら、この原稿が載るであろう研究会誌34号もなのです。そして、ここにも、先生のご配慮があったことをご知らせしておきましょう。松本・サントニ両先生のご退職記念号として、当初私が思い描いていたのは、24号の原野先生のご退職記念特集号でした。だから、方々に呼び掛けて、原稿を募ろう…とした矢先、松本先生から、記念号はありがたいが、普通でよい、例年通りの募集の仕方でよいとのお言葉。決して潤沢ではない研究会の財政にご配慮いただいたお申し出でした。そういうわけで、写真、略歴、研究業績一覧だけは掲載させていただくことにし、今回も通常の装丁の会誌となりました。

ふと気づくと、サントニ先生も、7年前にお会いした頃よりお痩せになられたようにお見受けします。これはなんといっても学生たちから慕われた先生のご指導によるものでしょう。特に京都の弁論大会の前や卒論や修論の仏文レジュメ作成の時期は、週末返上で学生を指導しておいででした。そのお姿は、人目を忍んで自らの

羽を抜き、機を織る鶴女房。学生たちは、先生が夜を徹して織った見事な千羽織をまとい、京都の弁論大会へ、そして、社会へと羽ばたいていったのでした。

松本先生もサントニ先生も、仏文教室のために心血を注がれ、すっかりお痩せになられてしまったけれど、先生方から受け取った血や羽は、私だけでなく、仏文教室を卒業した学生、先生方のお人柄に触れた方々全てに受け継がれていると思います。その大切な血や羽は、おもしろきこともなき世をおもしろく生きてゆくための支えに、きつとなることでしょう。